Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-11

コミュニケーション・メディアとしての時間 : ルーマンのシステム理論から

梅村, 麦生

(Citation)
社会の時間 : 新たな「時間の社会学」の構築へ向けて:30-41

(Issue Date)
2022-06-30

(Resource Type)
research report

(Version)
Accepted Manuscript

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90009406

第３章　コミュニケーション・メディアとしての時間
ルーマンのシステム理論から

梅村麦生

「時間の社会学」は古典的研究以来、時間の社会的機能を、異なる人びとや集団のあいだで活動を協調化させること（同期化したり、速度を揃えたり、順序づけたり）のうちに見出す一方で、社会や社会の各領域、あるいは時代や地域ごとに異なる固有の時間があると説いてきた。なおかつ人間は物理的時間、生理的時間、心的時間など、他のさまざまな時間が交差する中で社会的時間とも関わりながら生きていると考えられてきた[1)]。

そうしたさまざまな時間が交差すると考えられる中で、社会的時間あるいは社会や社会の各領域に特有の時間はどのように見出されるのか。本章ではそれを主にニクラス・ルーマンの社会システム理論に依拠し、コミュニケーション・メディアとして捉える観点から考察する。

第１節　社会システムの時間

ルーマンの社会システム理論はよく知られているように、「（諸）システムが在る」［Luhmann 1984: 30=2020: 27］ということ、そしてシステムとは「システムと環境の差異」［Luhmann 1984: 35=2020: 33］に基づくものであるということから、議論を始めている。ルーマンの社会システム理論による時間論の要石も、「システムの分出とともにそのシステムに固有の時間性が産出される」や「時間は観察を行うシステムによる構築物である」という、システム相対的な時間論の主張にある。

こうした考え方そのものは、社会学の時間論において一般的であったとも言える。ルーマンも参照している先行する理論から挙げていくと、まず行為理論や行為システム理論は、予期や企図、目的の設定が行為に時間的契機を付与するという考えを提起した[3)]。また冒頭で述べたように機能主義的な社会理論は、社会的時間を地域や時代とともに社会領域に応じて異なりうるものと見なし、歴史的時間の諸理論は出来事こそが時間を劃すると考えてきた[4)]。

そのうえで、社会システムに特有の時間という考え方からは、アルミン・ナセヒ［Nassehi 2008: 1, 344-347］や多田光宏［2013: 1-13］がルーマンの社会システム理論に基づく時間論の中で指摘したように、心的システムとしての個人の意識などとは異なる水準での、社会システムに特有の要素としてのコミュニケーションの時間性が挙げられる。ただし、個人の意識や行為と、社会的なコミュニケーションが異なる作動とその連関をもつという以上に、両者の時間性を弁別するものは必ずしも自明ではない[5)]。加えて、異なる社会システムどうしの時間の異同も、どのように考えられるのか。

以下、ルーマンが構成主義の認識論として述べたのと同様に、いかなる区別によって時間

は論じられるのかという観点のもと、ルーマンが社会システム理論のもとで時間を論ずるにあたって依拠した区別に基づきながら、社会システムの時間について考えていくこととする[6)]。

第２節　システム理論の時間概念

社会システムの時間に入るまえに、その前提となるルーマンの構成主義の認識理論［cf. Luhmann 1990a］と自己産出的なシステム理論［cf. Luhmann 1984=2020, 1997=2009］に基づく時間概念について、規定しておきたい。

（1）時間を観察する区別とその境界としての出来事

まず出発点とされるのは、「時間（の本質）とは何か」ではなく、「時間はいかなる区別によって観察されるのか」という問いであり、それに対する答えは、時間とは顕在性と潜在性の差異の統一からなる「意味」の一次元として、つまり他に事象的次元と社会的次元から区別される一次元として、「以前／以後の区別」を用いた観察による「構築物」である、というものである［Luhmann 1971: 47-56=1987: 51-60，Luhmann 1973: 87=1986: 117, 1984: 70, 110-122=2020 上: 65, 104-116，1990a: 33, 1990b: 114, 1997: 50-54=2009: 40-44］[7)]。

そして以前／以後を分かつのは、意味の他の一次元である事象次元によっても別の出来事から区別される、特定の「出来事」においてである。その以前／以後を分かつ、いわば境界としての出来事と結びつけられるのが、そのつどの「現在」または特定の「時点」である［Luhmann 1980a: 240-245=2011: 222-227, 1984: 116-118=2020 上: 110-112］[8)]。

以前／以後の変種としては「過去／未来」の区別があり、近代的時間概念はすでに不在である「不可変」の「過去」と、未だ存在しない「未規定」の「未来」を、顕在的な「現在」から画然と区別する。過去と未来の差異が拡大するほど、現在は収縮し瞬時化されたものとして捉えられる。そして出来事と結びついていた現在は、過去／未来を区別する時点として抽象化され、純粋に時間的な差異として示される。時点とりわけ日付（date）や時刻（clock time）の継起によって示されるのが、「時系列＝年代記」（chronology）である［Luhmann 1976, 1980a: 260-271=2011: 242-251］[9)]。

（2）時間の観察の前提となるシステム／環境の区別

以前と以後や過去と未来の区別を用いて観察を行うためには、それらと結びつく出来事について、「他の出来事との差異」と、何らかの「出来事としての同一性」との、双方を産出することができなければならない。したがって、自己産出的なシステム理論の観点から見ると、システム／環境の区別に基づく、出来事としての自己産出的な作動の回帰によって、そのシステムに固有の時間が産出される［Luhmann 1990b: 102］[10)]。

他方、「区別を用いた観察」は他ならぬシステムによって行われ、「観察に用いられる区別の統一」はあくまで「システム内的に構成されている」という点を考慮して［Luhmann 1990a:

41］、観察の出発点を時間的な区別ではなく、観察の営為そのものを可能にするシステム／環境の区別とすれば、システム／環境の区別とその回帰によって、そのシステムに固有の時間が産出される、となる。またシステムが分出するごとに、そのシステムに固有の時間も分出する、と言える［Luhmann 1973: 83=1986: 108, 1980b: 33, 1984: 70=2020 上: 65, 1990b: 102; cf. Bergmann 1981: 104-135］[11)]。

以上の通り、意味に基づく以前／以後や過去／未来の区別による観察を前提とする、システムの自己産出的な作動という出来事とともに生じる時間という考え方をもとに、社会システムの時間について考えていくこととする。

第 3 節　コミュニケーションの時間

社会的時間と言う場合、上述の意味の一次元という観点からは、純粋な時間や事象的次元と結びつく時間とは違った側面からの、自己と他者の差異と結びつく、しがたって単に個人的時間ではない、以前／以後の統一体と見なすことができる。あるいは社会的時間を社会学的観点から析出した時間と捉えると、心（理学）的時間、生理（学）的時間、物理（学）的時間などから区別される。

そのうえで社会システムの時間は、社会システムの作動と結びつく以前／以後の統一体である。そしてルーマンの社会システム理論において、社会システムを構成する要素としての出来事は、コミュニケーションである。

> コミュニケーションをコミュニケーションに接続できるようになるためには、時間が必要となる。このような作動様式のゆえに、システムと環境とは時間的に切り離されることになる。［Luhmann 1997: 83=2009: 70-89］

> どのシステムにとっても世界は同時に存在するにもかかわらず、脳、意識システム、コミュニケーション・システムは、相異なる出来事の連鎖を形成するのであり、したがってそれぞれの作動の速さも異なってくる……。［Luhmann 1997: 115=2009: 120］

コミュニケーションの継起に固有の時間を想定すると、さらにそのコミュニケーションの種類や範囲に応じて、つまりルーマンがさまざまな社会システムとして提起したような、相互行為、組織、分化した各機能システム（経済、法、学術、等々）、社会運動、そして全体社会といった、それぞれの社会システムごとの時間が考えられる［cf. Luhmann 1997: 595-865=2009: 887-1162; Bergmann 1981: 254-285］。

しかしその一方で、近代社会という全体社会においては、機能分化した社会構造に相応して、つまり相異なるコミュニケーションの継起をもつさまざまな社会システムが並行して作動するという事態の招来とともに、あらゆる社会システムに適用しうる、したがって事象的次元や社会的次元の捨象された、現在における過去／未来の区別というより純粋な時間

概念が定着した［Luhmann 1973: 86-87=1986: 114-117, 1980a: 255-271=2011: 238-251］。この近代的時間概念が量化されて時刻となり、時刻とその継起としての時系列があらゆる社会システムに対して示されるようになった。

そうすると、現在における過去／未来の区別と、時刻による時系列へと収斂しているかにも思われる近代的な時間概念のもとで、どのようにさまざまな社会システムに固有の時間を捉えうるのか。

その点に関わるのが、ルーマンの社会システム理論による時間論に対してアルミン・ナセヒが指摘した作動時間と観察時間の区別や、ルーマンも参照したラインハルト・コゼレックの歴史理論における出来事時間と構造時間の区別である［cf. 梅村 2020b: 88-89］。

まず作動時間と観察時間の区別に関しては、「作動時間（operative Zeit）」が自己産出的な出来事列の連続によって産み出される時間を指すのに対し、時間的な区別を介した観察によって見出される時間が「観察時間（Beobachtungszeit）」である。したがって作動時間と観察時間の間には、自己産出的な作動の連鎖によって初めてそのシステムに固有の時間が産み出されるという一方で、時間的な区別を用いて観察することで初めて時間は見出されるという、循環論法的ないし「パラドックス」的な関係がある［Nassehi 2000: 29-50; cf. Esposito 2009: 27-31=2010: 32-34］。

そして出来事時間と構造時間に関しては、コゼレックによれば歴史において異なる時間的な広がりをもつものとして「出来事」と「構造」は区別され、出来事が構造的な条件のもとでのみ生じる一方で、構造は「出来事というメディア」によってのみ捉えることができるという、相互関係が想定される。そして出来事はその出来事に特有の「以前と以後」を伴うものとして「物語」られるのに対して、構造はより長期的な「持続」を示すものとして「記述」される［Koselleck 1979: 144-157］。

以上、観察時間によって初めて見出されたり、構造時間によって初めて位置づけられたりすることが想定される、作動時間ないし出来事時間としての社会システムの時間とは、どのようなものであるだろうか。

例えばナセヒは意識における作動時間を定式化したモデルとして、エトムント・フッサールによる顕在的なもののなかで非顕在的なものを指し示す過去把持の働きを挙げている[12]。実際に社会学においても、上述の通り行為理論は記憶や予期の働き、目的と手段の区別などが行為に時間的契機を付与すると論じてきた。したがって社会システムについても、社会的記憶（あるいは、他者の記憶についての記憶）や社会的予期（あるいは、他者の予期についての予期）が時間的契機を付与している、と考えることができるかもしれない。社会学の時間論も、そうした社会的記憶や予期、共通の目的などと結びつく相互行為や共同行為に社会的時間の源泉を見出してきた。

ただしルーマンにおいて、「予期」はあくまで社会システムに「時間形式」としての「構造」を付与するものであり、「記憶」もシステムの「時間」に対して「相互に前提しあう循環的な関係がある」ものとされている［Luhmann 1984: 392-421=2020 下: 41-68, 1996: 309-313;

cf. 梅村 2020b: 84-85］。そうだとすると、むしろ構造時間ないし観察時間の側に関わるものとも考えられる。

しかしさらに、ルーマン［Luhmann 1984: 191-241=2020 上: 187-237］にしたがって、社会システムの作動がコミュニケーションであるとするならば、つまり、コミュニケーションの「受け手（Adressat）」を「自己（Ego）」、「送り手（Mitteilender）」を「他者（Alter）」と見なした場合の、「受け手」による「情報と伝達の差異」の「理解」によって生じる「コミュニケーション」が社会システムを構成する要素であるとならば、記憶や予期と結びついた行為によってもたらされる時間性のみならず、情報と伝達の差異それ自体による時間性の産出が考えられる。わけてもルーマンは行為と体験を、意味選択の帰属先が「自己」に向けられるか「他者」に向けられるかに応じて区別しているが、それになぞらえるならば、情報／伝達の差異を体験／行為の差異の一種として捉えることができ、そこに行為の時間ならぬいわば体験の時間や、行為時間と体験時間の差異を見出すことができる[13)]。

以上のように仮定すると、観察時間や構造時間が作動時間や出来事時間の回帰を支えていると認めたうえで、社会システムに固有の時間として、行為や相互行為によってもたらされる時間のみならず、情報／伝達の差異によってもたらされる時間、さらに言えば行為時間と体験時間の区別によって産み出される独自の時間について考えられるようになる。

むろん、観察時間によってしか作動時間を見出すことはできないというパラドックス的な構造がある点に変わりはないが、そうした差異をまた別の角度から論じておきたい。

例えばルーマンは、コミュニケーション一般や特定のコミュニケーションの接続の可能性を高めるものとしてコミュニケーション・メディアを構想しているが、伝播メディアとしての文字から言語、印刷術、電子メディアへの発展は、「社会的冗長性」の到達範囲のみならず、情報／伝達の間の時間的な差異を大きく変化させたと考えられる。

そこで以下では、コミュニケーションにおける情報／伝達の差異に関わる時間として、コミュニケーション・メディアとしての時間という考えについて検討していく。

第 4 節　コミュニケーション・メディア

ルーマンは認識理論としてラディカル構成主義を採用し、社会システム理論に「自己産出（オートポイエーシス）」の概念を導入し発展させていく中、コミュニケーション・メディアを論じるにあたって後年さらに取り入れたのがメディアと形式の区別である。以下、時間のメディアと形式について考えるため、その前提となる議論を見ておく［Luhmann 1995: 165-214=2004: 167-219, 1997: 190-412=2009: 209-474］[14)]。

まず、メディアもあくまでシステムの作動に相対的なものとして、つまりシステムの作動に伴うメディア基体／形式の区別によって再生産されるものとして扱われる。ここでメディア基体は当該メディアを構成する要素がルース（緩やか）にカップリングされている状態を指し、形式は同じ要素がタイト（厳密）にカップリングされている状態を指す。したがってメディア基体と形式はそれ自体で存在するものではなく、システムのそのつどの作動に

よって区別されるものである。知覚メディアを例に取ると、「光」と「物」の差異は物理的に構成されているのではなく、視覚という知覚の働きによって、「光」をメディア基体として「物」（の像）という形式が構成されている。それがコミュニケーション・メディアに関しては、例えば言語における語／文、経済における貨幣／価格、学術における真理／命題、司法における法／判決文、政治における権力／命令などが、メディア基体と形式の差異を示している。

このメディア基体と形式の関係については、システムの作動ごとにメディア基体はタイトにカップリングされて形式となり、やがてふたたびルースなカップリングへと解体される（その結合と解体に時間がかかることから、ここにすでに時間が含意されている、ともルーマンは述べている）。つまり作動の中で通用するのは、会話における文、市場における価格、裁判における判決文のように形式の側であるが、個々の作動を超えて、システムのもとでより長い持続力をもつのはメディア基体である。千円札十枚使って一万円を支払ったとしても、その一万円分を受け取った人が千円札十枚を同じように使う必要はない。ある語を特定の文の中で使ったからといって、その語を別の文の中で使うことができなくなるわけではない。つまり、語は新たな文の中で、貨幣は新たな価格のもとで用いられる。しかしその語がその後ひとたびも文の中で用いられることがなければ、あるいは貨幣が何らかの価格のもとで支払われることがなくなってしまえば、それらのメディア基体は存続しなくなる。メディア基体と形式の間には、そうした非対称性と相互依存の関係が想定されている。

そしてコミュニケーション・メディアに関しては、情報が伝達される社会的な範囲を拡大する「伝播メディア」と、伝達された情報が後続の行為の前提として受け入れられる可能性を高める「成果メディア」または「象徴的に一般化されたコミュニケーションメディア」が区別される。伝播メディアの例として挙げられるのが言語、文字、印刷術、電子メディアである。伝播メディアが発展するにつれて、社会的な到達範囲はますます拡大する一方で、言語のもつ否定の機能によるイエス／ノーの二元化を拡張することで、コミュニケーションで提示された選択肢の受け入れと拒否の対立を先鋭化させる[15]。その対立の先鋭化に対応して、特定のコミュニケーションにおいて受け入れ／拒否を条件づけることで提示された選択肢の受け入れ可能性を高めるメディアが成果メディアであり、物を手放すのを見過ごす、罰則を受ける、命令に従う、私見を排除するといった、無条件には受け入れられそうもない選択肢が受け入れられる可能性を高めるのが、貨幣、法、権力、真理といった「象徴的に一般化されたコミュニケーション・メディア」としての成果メディアである。

ここで意味の三次元のうち、社会的次元に繋留（社会的な伝達範囲の拡大を指向）するのが伝播メディアであり、とりわけ事象的次元に繋留（事象的な差異の一般化を指向）するものが成果メディアあると言えるとすると、時間的次元に繋留するコミュニケーション・メディアとして、時間メディアの可能性について考えたい。

伝播メディアの発展によるイエス／ノー、受け入れ／拒否の対立の先鋭化に対して、事象的次元での一般化によって応じたのが成果メディアであったとすると、時間メディアは伝

播メディアによる同様の対立に時間的次元での一般化によって対応し、成果メディアとは補完ならびに対立の関係にあると考えられる。あるいは伝播メディアが情報／伝達の差異や体験／行為の差異を社会的次元に縮減し、成果メディアが同じ差異を事象的次元に縮減していると考えられるとすると、時間メディアはその差異を時間的次元へと縮減するものである、と言える。

第５節　時間メディアと時間形式

コミュニケーション・メディアの一つとして時間メディアを捉え、その時間メディアをメディア基体と形式の区別に基づいて論じるとすると、時間メディアにも要素のルースなカップリングとしての狭義の時間メディア（基体）と、タイトなカップリングとしての時間形式の区別が問われうる。

ルーマン自身がコミュニケーション・メディアとしての時間や、またメディア／形式の区別の観点から時間について論じているわけではないが、「時間というメディア」に関して述べている箇所を挙げておくと、「時間」が「強く抽象化され、任意に処理可能なメディア」として現われるとき、「協調化されていないが同時的に流れる多数の現時点（Jetztzeitpunkten）」として現われるとし、それが例えば「はるかに確固とした機構である組織」によって「複数の時点が内容で占められ」るように「タイトにカップリングされている」と記していた［Luhmann 1990b: 126］。

以上から考えると、まず時間メディアがルースにカップリングされている状態を示すメディア基体としては、以前／以後の、また過去／未来の区別を構成する時点が考えられ、それが量化されて時刻や時間記号 t となる。ルーマンが「時点はそれ自体としてではなく、あくまで以前と以後の間の差異としてのみ観察されうる」［Luhmann 1996: 309］としたように、特定の時点は以前の時点や以後の時点を参照する中でのみ、そして出来事と結びつくときは出来事の生成／消滅とともにそれ以前や以後の出来事を参照する中でのみ、観察される。したがって時間メディアは、それぞれの社会システムに固有の要素をなす出来事としての作動に応じて、例えば組織であれば意思決定、法であれば判決、経済であれば支払い、マスメディアであれば新しい情報発信とともに、それぞれのシステムと結びついた時間メディアが観察されうる。

したがって、近代社会において時間概念を構成する区別が過去／未来に収斂し、時間メディアが時点やさらに時刻に抽象化されていったとすると、言語の領域において文字の統一や標準語の制定が進んだのと類比的に、時間メディアもまた全体社会の水準では標準化が進んだと見なしうる一方で、その時間メディアのメディア基体がタイトにカップリングされたあり方としての時間形式は、近代社会におけるさまざまな社会システムの分化や分出にともなって、それぞれの作動とともに固有の形式として現われていると考えられる[17)]。

その時間メディアのタイトなカップリングとしての時間形式を、ルーマンが時間に関わる「形式」として言及しているものから考えると、(1) 選択的な「原因」と「結果」の結び

つきとして、現在における過去と未来を「因果性」で結びつける「因果図式」［1990b: 116］、（2）とりわけ組織における「キャリア」や「期限と期日」といった「時間図式」［Luhmann 1968: 8-13, 2000: 174-178］[18]、(3) 法や経済などの領域で用いられる、「規範」「法」「稀少性」「リスク」といった「個々の出来事に構造としての価値を付与することによって拘束」する「時間拘束」の形式［Luhmann 1991: 59-81=2014: 68-91, 1993: 126-131=2003: 133-139］[19]、(4) 出来事の生じる可能性の遊域の制約としての「構造」と、特定の出来事どうしの連鎖の可能性を高める「過程」の形式［Luhmann 1984: 387-394, 481-486=2020 下: 38-43, 120-124］、などが挙げられる。

以上、本章では、社会システムに固有の時間として、コミュニケーションにおける情報／伝達の差異と結びつく時間について検討し、コミュニケーション・メディアとしての時間という構想と、それを扱うための時間メディアと時間形式の区別という観点を提起した。ここではその端緒しか論じられていないが、時間メディアと時間形式の区別とその相互規定的な関わりは、冒頭で述べたさまざまな時間が交錯する中での社会的時間や、あるいは近代社会における時間の統一化と多様化の同時進行といった「時間の社会学」の古典的で中心的な問題系に関しても、示唆があると考えられる。

注

1) 本書第 1 章の鳥越論文、また社会的時間と他のさまざまな時間との交差に関しては、ピティリム・ソローキン、ジョルジュ・ギュルヴィッチ、アルフレート・シュッツらの古典的研究に加えて、特に Adam［1990=1997］、Urry［2000: 105-130=2006: 187-230］、辻［2008］などを参照のこと。上記 J・アーリの当該章のタイトルも“Times”と複数形にされている。

3) 特に Schütz［1932: 93-105=2006: 138-153］、Parsons［1951: 88-96=1974: 97-106］を参照のこと。

4) 本書第 5 章の大窪論文、第 6 章の木村論文を参照のこと。

5) また「時間は自己産出システムの理論にとって、それ以上遡ることのできないシステムの出来事時間性を表現するうえで役立つが、いわばシステム概念の種差であるがゆえに、それ以上区別することができない。･･･差異なき差異として･･･時間それ自体は区別できない」［Nassehi 2000: 49］と、「時間のなかにシステムがあるのではなく、システムがまずあってそれが時間を持つのでもなく、システムが時間なのである」［多田 2016: 14; cf. 多田 2013: 515］という両者の主張は、意味の一次元としての時間と、システム／環境の区別によって産出される時間というルーマンの考え方からは離れており、独自に検討が必要な内容となっている。

6) 以下では自己産出やラディカル構成主義、またメディア／形式の区別といった道具立てを取り入れている、主に『社会システム理論』とそれ以降のルーマンの構想に基づいている。それ以前のルーマンの諸構想に基づく時間論としては、Bergmann［1981］がある。また、ルーマンによる時間論に関わる著作全体の概括としては、梅村［2020b］を参照のこ

と。

7) 同様の内容を過去／未来の区別をもとに定義した箇所を挙げておく。「筆者は時間を、過去と未来の間の差異に関するリアリティの解釈として定義することを提起する」［Luhmann 1976: 135］。「したがって時間とは意味システムにとっては、リアリティを“過去と未来”の差異との関連において解釈することなのである」［Luhmann 1984: 116=2020 上: 110］。後者でルーマンは、ここで「意味システムにとって」と添えたのは、意味がなくても時間でありうるものを、意味の時間次元によって解釈し処理していることを指すためである、としている。つまり、意味というものがなければ時間がないのか、という疑問は不問にされている。その点に関しては多田［2016: 20］もまた、「意味の問題は時間の問題である」というシュッツの命題に依拠しつつも、「時間意味論の観点から見れば、『意味の問題は時間の問題』というより、逆に『時間の問題は意味の問題』と言えることは注記しておく」と記している。そこで多田が続けているように、この論点は後述の作動時間と観察時間の問題系にも関わる。

9) つまり以前と以後を画する、過去と未来を画する差異の統一（単位）としての時間と、前後の他の時刻どうしを画する差異の統一（単位）としての時刻およびその連続からなる時系列とは区別される。したがって時間の時刻への量化は、座標軸上に置かれることを念頭にアンリ・ベルクソンにならって「時間の空間化」とも呼ばれるが、それ自体はむしろ時間的な差異以外との結びつきが断ち切られたものとして、ルーマンが言うように「それ以前はもっぱら空間や運動のメタファーを用いて概念化されていた時間の時間化」［Luhmann 1980b: 59］つまり「時間概念のよりラディカルな時間化」［Luhmann 1990b: 98］と呼ぶべき事態に含まれる――いわば、「持続」における「流れ」のような比喩から濾過されたものとして。

10) この点に関連して、区別された二つの値の境界を横断するためには「時間が」かかり、その「自己非対称性」が実行される中で「時間が成立」する、とも言われている［Luhmann 1997: 224-5=2009: 249-250; cf. 梅村 2020b: 84］。

12) 多田はそこからさらに、以下のように主張している。「以下では……自己準拠的な社会システムを、意識と並ぶ世界のなかの主体のひとつとして捉えるよう提案したい。社会システムとは、コミュニケーションの志向性を通じて固有の環境を観察する、自律的な主体にほかならない。社会システムの固有時間とは、社会システムという主体の内的時間なのである」［多田 2013: 3］。

13) 世代論や時代診断で用いられてきた「非同時的なものの同時性」概念のもとで体験時間とその多元性について検討したものとして、梅村［2020a: 104］も参照のこと。またシュッツは、ベルクソンが「砂糖水を作るには砂糖が水に溶けるのを待たねばならない」とした物理的次元、ピエール・ルコント＝デュ＝ヌイとアレクシス・カレルが「傷ができたとき、それが治るまで待たなければならない」とした生理的次元を例に挙げて、「人間条件によって賦課された時間構造」としてのレリヴァンスをもつ「待機」について論じている

が［Schutz 1970: 179-182=1996: 248-250］、鳥越［2020］はそのシュッツの待機論に基いて、「他者を待つこと」という社会的次元をも含む、「負の行為」としての待機現象一般に関する社会学的研究の可能性を示唆している。この「負の行為」としての待機に見出される時間は、本稿で言えば（選択の帰属先が他者や環境に向けられる）体験時間に位置づけうる。

14) ルーマンによるメディア／形式の区別とコミュニケーション・メディアについては、梅村［2020b: 89-91］も参照のこと。

15) ルーマンの言う活版印刷の発明が宗教改革の下地を作ったという議論や、今日で言えばインターネットやソーシャル・メディアの発展と社会運動の結びつきが思い起こされる。

17) ルーマン［Luhmann 1997: 230-249=2009: 257-280］は言語に代表される伝播メディア以外に、個別の社会システムを超えて用いられるコミュニケーション・メディアの例として「道徳」や「価値」を挙げる一方、機能分化した近代社会においては例えば善／悪の統一的な基準は喪失し、複数のシステムを超えて通用する力をもたなくなったと見なしているが、それに代わってさまざまなシステムを超えて用いられているのが時間メディアと言えるかもしれない。そうした点からは、ルーマンがユルゲン・ハーバーマスとの論争［cf. Luhmann 1971=1987］の中で指摘した討議理論における時間的制約の欠如も想起される［cf. 梅村 2020b: 93-94 (註 4)］。

18) ルーマンや他の論者による組織の時間論に関しては、本書第 11 章の樋口論文を参照のこと。

19) 時間拘束の形式としてのリスクを資源として用いる金融の領域における時間に関しては、Esposito［2009=2010］および本書第 12 章の金信行論文を参照のこと。

文献

Adam, B. [1990] *Time and Social Theory*, Cambridge: Polity.（伊藤誓・磯山甚一訳『時間と社会理論』法政大学出版局，1997 年）

Bergmann, W. [1981] *Die Zeitstrukturen sozialer Systeme*, Berlin: Duncker & Humblot.

Esposito, E. [2009] *Il futuro dei futures*, Pisa: ETS. (A. Corti [Übers.] *Die Zukunft der Futures: Die Zeit des Geldes in Finanzwelt und Gesellschaft*, Heidelberg: Carl-Auer，2010.)

Koselleck, R. [1979] *Vergangene Zukunft*, Frankfurt am Main: Suhrkamp.

Luhmann, N. [1968] »Die Knappheit der Zeit und die Vordringlichkeit des Befristeten«, *Die Verwaltung*, 1.

――― [1971] »Sinn als Grundbegriff der Soziologie«, J. Habermas und N. Luhmann, *Theorie der Gesellschaft oder Sozialtechnologie*, Frankfurt am Main: Suhrkamp.（＝一九八七、佐藤嘉一訳「社会学の基礎概念としての意味」J・ハーバーマス／N・ルーマン『批判理論と社会システム理論』佐藤嘉一ほか訳，木鐸社，1987 年.）

――― [1973] »Weltzeit und Systemgeschichte«, P. C. Lutz (Hg.), *Soziologie und Sozialgeschichte*,

Opladen: Westdeutscher.（土方昭訳「世界時間とシステム史」土方昭監訳『社会システムと時間論』新泉社，1986 年.）

――― [1976] "The Future Cannot Begin," *Social Research*, 43(1).

――― [1980a] »Temporalisierung von Komplexität«, *Gesellschaftsstruktur und Semantik*, Bd.1, Frankfurt am Main: Suhrkamp.（徳安彰訳「複雑性の時間化」『社会構造とゼマンティク 1』法政大学出版局，2011 年.）

――― [1980b] »Temporalstrukturen des Handlungssystems«, W. Schulchter (Hg.), *Verhalten, Handeln und System*, Frankfurt am Main, Suhrkamp.

――― [1984] *Soziale Systeme*, Frankfurt am Main: Suhrkamp.（馬場靖雄訳『社会システム』上・下，勁草書房，2020 年．）

――― [1990a] »Das Erkenntnisprogramm des Konstruktivismus und die unbekannt bleibende Realität«, *Soziologische Aufklärung*, Bd.5, Opladen: Westdeutscher.

――― [1990b] »Gleichzeitigkeit und Synchronisation«, *Soziologische Aufklärung*, Bd.5, Opladen: Westdeutscher.

――― [1991] *Soziologie des Risikos*, Berlin und New York: Walter de Gruyter.（小松丈晃訳『リスクの社会学』新泉社，2014 年.）

――― [1993] *Das Recht der Gesellschaft*, Frankfurt am Main: Suhrkamp.（馬場靖雄ほか訳『社会の法』1・2、法政大学出版局，2003 年．）

――― [1995] *Die Kunst der Gesellschaft*, Frankfurt am Main: Suhrkamp.（馬場靖雄訳『社会の芸術』法政大学出版局，2004 年.）

――― [1996] »Zeit und Gedächtnis«, *Soziale Systeme*, 2(2).

――― [1997] *Die Gesellschaft der Gesellschaft*, Bd.1-2, Frankfrut am Main: Suhrkamp. (馬場靖雄ほか訳『社会の社会 』1・2，法政大学出版局，2009 年．)

――― [2000] *Organisation und Entscheidung*, Opladen: VS.

Nassehi, A. [1993→2008] *Die Zeit der Gesellschaft*, 2.Aufl., Wiesbaden: VS.

――― [2000] »Tempus fugit? 'Zeit' als differenzloser Begriff in Luhmanns Theorie sozialer Systeme«, H. Gripp-Hagelstange (Hg.), *Niklas Luhmanns Denken*, Konstanz: Universität Verlag Konstanz.

Parsons, T. [1951] *The Social System,* Glencoe, Illinois: Free Press.（佐藤勉訳『社会体系論』青木書店，1974 年.）

Schütz, A. [1932] *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt: Eine Einleitung in die verstehende Soziologie*, Wien: J. Springer.（佐藤嘉一訳『社会的世界の意味構成――理解社会学入門』改訳版，木鐸社，2006 年.）

Schutz, A. [1970] *Reflections on the Problem of Relevance,* edited by Richard M. Zaner, New Haven and London: Yale University Press.（那須壽・浜日出夫・今井千恵・入江正勝訳『生活世界の構成』マルジュ社，1996 年.）

多田光宏 [2013]『社会的世界の時間構成』ハーベスト社.
――― [2016]「社会学の基本概念としての時間――現象学的社会学と社会システム理論からの展開」『社会学史研究』38.
鳥越信吾 [2020]「社会学における待機の問題――シュッツのパースペクティブからの接近」中西眞知子・鳥越信吾編『グローバル社会の変容――スコット・ラッシュ来日講演を経て』晃洋書房.
辻正二 [2008]「現代社会における社会的時間」辻正二監修・山口大学時間学研究所編『時間学概論』恒星社厚生閣.
梅村麦生 [2020a]「非同時的なものの同時性――社会学における非同時性の問題について」『社会学史研究』42.
――― [2020b]「ニクラス・ルーマンの時間論」『社会学雑誌』37.
Urry, J. [2000] *Sociology beyond Societies*, Oxford: Routledge.（吉原直樹監訳『社会を越える社会学』法政大学出版局，2006 年.）